

## カルナップ哲学における「解明」について

高橋 和孝(Kazutaka Takahashi)

北海道大学大学院理学院

---

カルナップは、「分析的言明／総合的言明」という、カント以来の伝統的二分法を、言語的要因と事実的要因という概念によって捉えなおした。それによると、分析的言明とはそれを定立する言語の規則、すなわち言語的要因だけにもとづいて真であることが帰結するような言明であり、総合的言明とはその真偽が言語的要因だけでなく、事実的要因にも依存するような言明である。クワインは、われわれの言明をこのような二つの領域に切り分けようとする考えは根拠のないドグマにすぎないとする批判を展開した。そして、こうしたクワインの批判は、ホーリズムという立場として結実し、後の科学哲学、言語哲学に多大な影響を与えることになった。

しかし近年、カルナップとクワインの論争を再検討しようとする試みのなかで、クワインの批判は自然言語に対してしか当てはまらないとする見解がでてきた。カルナップ自身も主張しているように、「分析的言明／総合的言明」の区別は自然言語においてではなく、人工言語において明確に規定されるのである。こうして彼らの論争の争点は、「自然言語において明確でない概念を人工言語において持ち出すことに意味はあるのか」という点にあったと考えるのが適切であろう。

本発表の目的は、彼らの対立をこのように理解した上で、カルナップが提唱する「解明」という試みに解釈を与えることで、カルナップの立場を擁護することを試みる。「解明」とはカルナップ自身の言葉を借りれば、「日常的に曖昧な概念を、新しく構成されたより正確な概念で置き換える仕事」である。彼自身はこうした試みの真意について、ほとんど述べていないため、解釈の余地は大いにある。彼の「解明」という試みにひとつの解釈を与え、人工言語において「分析的言明／総合的言明」という区別を持ち出すこともそうした試みの一環として捉えることで、カルナップの立場を擁護できることを示すことが本発表の眼目である。